

若年性認知症の人の家族介護キャリアプロセス

—夫を介護する妻を中心に—

○ 筑紫女学園大学 金 圓景 (7133)

キーワード3つ：若年認知症、家族、介護

1. 研究目的

厚生労働省の長寿科学総合研究事業の一環として大規模調査を行った、朝田（2009）によると、若年性認知症は全国に約 3.78 万人おり、推定発症年齢の平均は 51.3 ± 9.8 歳であった。また、その家族介護者の約 6 割が抑うつ状態にあることや発症後、約 7 割が収入が減ったと回答しており、若年性認知症の人を支えている家族の精神的な負担や経済的な負担が大きいことが確認できる。

若年性認知症の人に関する支援は、新オレンジプランの一つの柱となっているが、国内において関連研究が報告され始めたのは 2005 年以降からであり、若年性認知症の家族を介護する経験（久松 2010）やその受容過程（小池ら 2015）などに関する研究などが数件報告されているが、家族介護者が介護を始めてから終わるまで、どのような状況に置かれていたのかについては必ずしも十分に検討されて来なかった。

そこで、本研究では、若年性認知症の人を支える家族の介護キャリアプロセスを通して、家族が置かれている状況と課題を明らかにすることを目的とする。特に、若年認知症の夫を看取った妻のこれまでの介護経験を中心に検討する。なお、本研究は日本学術振興会の研究補助金若手研究 B（15K17231）「認知症の家族支援システム構築に関する日韓比較研究（平成 27～30 年度）」の助成を受けたものである。

2. 研究の視点および方法

本研究では、若年認知症の人を支える家族が置かれている状況について介護キャリアプロセスに基づいて検討する。Aneshensel ら（1995）は、介護キャリアプロセスについて介護の役割が始まった「役割獲得」段階から「役割実践」、「役割離脱」の 3 段階に分けて検討しており、それぞれに適切な介入が必要であると述べている。

調査は、若年認知症の夫を介護していた妻介護者 4 名を対象に、2016 年 1 月から 2017 年 3 月までにかけて行い、プレ調査を含んで 3 回の半構造的インタビュー調査を実施した。調査は、1 回当たり 45 分から 70 分までとなっており、介護生活全般について自由に語っていただき、その後、介護中に困っていたことやそれに対して、受けられた支援内容、改善してほしい支援内容などについて行った。分析の際には、佐藤（2008）の質的データ分析法を参考に、逐語録を作成し、定性的コーディングを行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会が定める研究倫理指針を遵守し、調査対象者に対しては、書面と口頭にて研究の趣旨を十分説明し、同意を得た。また、インタビュー内容をICレコーダーにて録音することの了解を得た。調査及び分析の際には、調査対象者の人権や安全を最優先するよう細心の注意を払った。なお、本研究は調査実施前に所属機関となる筑紫女学園大学の「人を対象とする研究倫理」審査より承認を得て実施した。

4. 研究結果

調査対象者及び要介護者の基本属性について表1（2017年3月時点）にまとめる。なお、介護期間は診断時期と関係なく、介護が必要となったと思われる時期から含んでいる。

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	平均
年齢	68歳	76歳	68歳	69歳	70.25
夫が認知症診断を受けた当初の年齢	58歳	60歳	55歳	56歳	57.25
介護期間	約11年	約18年	約10年	約9年	12

介護が始まった初期の「役割獲得」段階では、夫の物忘れが続き、お仕事を続けることが難しくなり、夫婦共に今後への不安が大きくどこに相談すれば良いのか困っていたこと、病院で認知症であると診断を受けたことを機に仕事を辞めていたこと、若年性認知症の方が利用できるサービスが充分ではなかったため一人で介護を担っていたことが把握できた。介護の「役割実践」段階では、在宅生活を維持することに不安を覚えるような出来事が増えたこと、介護うつになったことなどを理由に認知症対応型共同生活介護・特別養護老人ホーム入所させたか、病院と在宅を往復しながら支えていたことが分かった。その中で、最も困っていたことは若年性認知症の人専用のサービスがないことであった一方で、最も支えになったのは若年性認知症の人と家族が参加できる会とその仲間の存在であることが把握できた。平均して約12年の介護生活を経験した家族は「役割離脱」段階では、介護生活が終わったという安堵と気の張りが抜けるような感じがしたこと、介護生活中に出会った仲間とのグループができ、新たな活動を続けていることが把握できた。

5. 考察

本研究では、若年性認知症の人を支える家族の介護キャリアプロセスを通して、家族が置かれている状況と課題を検討した。その結果、介護の役割段階別に直面する課題は、医療・介護・福祉へと多岐にわたっており、段階によって相談窓口や対応が異なっていたから横断的な支援体制構築が必要であることが検討された。今後、若年性認知症の人とその家族を支えるための支援システム構築に向け、サービス・デリバリシステムを検討することが課題として残された（金 2017）。